

高等教育機関における発達障害学生への

ピアサポートに対する学生の意識

—発達障害学生が抱える困難さの種類に焦点を当てて—

山口県立大学 永 瀬 開

I. 問題と目的

近年、高等教育機関における発達障害学生が増加するのに伴い（日本学生支援機構，2016）、発達障害学生が抱える様々な困難さが注目されている（White, Elias, Salinas, Capriola, Conner, Asselin, Miyazaki, Mazefsky, Howlin, & Getzel, 2016）。White et al. (2016) が行った調査によると、高等教育機関における発達障害学生は、良好な対人関係を構築維持することの困難さ、複数のしなければならない課題をマネジメントすることの困難さ、感情のコントロールにおける困難さを抱えていることが明らかにされている。そして、こうした状況の中で、高等教育機関における発達障害学生をどのように支援するのかということが喫緊の課題となっている（佐藤・徳永，2006；佐藤・徳永，2007）。この課題に対して、2016年4月施行の障害者差別解消法において合理的配慮の提供が定められるとともに、現在多くの高等教育機関において発達障害学生支援の実践が行われている（川住・吉武・西田・細川・上埜・熊井・田中・安保・池田・佐藤，2010；池田・田部・石川・内藤・神長・石井・高橋，2017）。しかしながら、発達障害学生支援の実践にあたっては、同時に様々な課題も報告されている。そのため、発達障害学生支援における課題について検討し、その課題を解決していくことは、高等教育機関における発達障害学生支援の体制を充実させていく上で必要不可欠である。

これまで高等教育機関における発達障害支援

を実施していく際の課題の1つとして、発達障害学生の有する多様な支援ニーズに対して、相談スタッフや一部の教職員が支援を行っているという課題が指摘されている（丹治・野呂，2014）。丹治・野呂（2014）は、発達障害学生支援に関する文献のレビューを行った。その結果、発達障害学生の有する支援ニーズとして、「学業上の困難」「大学生活上の困難」「対人関係上の困難」「就職上の困難」「情緒・精神面の困難」といった多様なニーズがあることが明らかになった一方で、これらの支援ニーズに対する支援を高等教育機関の相談スタッフや一部の教職員が担っていることも明らかにした。ここで明らかにされた結果は、以下の点で問題であると考えられる。つまり、相談スタッフや一部の教職員では、発達障害学生の有する多様な支援ニーズを把握することが十分ではないという点である。上述したように、発達障害学生の有する支援ニーズは多岐にわたるとともに、「学業上の困難」があるがために十分な成績が取れず「就職上の困難」が生じることなど、それぞれの支援ニーズは関連し合うため複雑なものとなる。また、これらの支援ニーズが生じるのは単に大学の講義時間だけでなく、講義と講義の間の時間、教育実習や福祉実習などの実習先、授業の準備のためのグループワーク、サークル、アルバイト先など広範な場面にわたる。このように、広範かつ複雑な発達障害学生の有する支援ニーズを相談スタッフや一部の教職員が把握することは困難であると考えられる。加えて、

これらの状況は相談スタッフや一部の教職員に対して過剰な負担となることも考えられる。この点をふまえると、相談スタッフや一部の教職員以外にも発達障害学生の有する多様なニーズを把握し、対応することのできる支援の実施者を考える必要がある（後藤・菊池, 2016）。

このような相談スタッフや教職員の負担を軽減し、発達障害学生に対する支援をより充実させる存在として、発達障害学生と同じ高等教育機関で学ぶ障害のない学生によるピアサポートが関心を集めている（Gardiner & Iarocci, 2014; 丹治・野呂, 2014; 後藤・菊池, 2016）。ピアサポートとは、支援を必要とする人が行う特定の行動もしくは、直面するストレスや身体的、心理的な特徴に関する実践的な知識を持つ人によって行われる支援であると定義される（Denis, 2003）。この定義をふまえると、発達障害学生に対するピアサポートを行う障害のない学生（以下、ピアサポーター）は、大学生活を送る上で必要な行動や、大学生活で直面するストレスや心理面、身体面での特徴に関する実践知を持っていると考えられ、それらの実践知に基づいて支援を行うということがいえる。発達障害学生に対するピアサポートが注目されている背景には、以下の2つの理由が挙げられる。まず、1点目は、ピアサポートを行うことによって、発達障害学生にとって行うことが困難な、適切な学習や生活スキルを、発達障害学生が身につけやすいという理由である（McCurdy & Cole, 2014; Watkins, O'Reilly, Kuhn, Gevarter, Lancioni, Sigafos, & Lang, 2015）。Watkins et al. (2015) は、発達障害の1つである自閉症スペクトラム障害のある学生がピアサポートによってスキルを身につけることについて、彼・彼女らが模倣しやすい環境でスキルを学ぶことができるため、般化が容易であるということを指摘している。そのため、ピアサポートは発達障害学生が大学生活を過ごす上で必要なスキルを身につけるといふ点において有益であるとともに、相談スタッフや一部の

教職員では行うことが難しい「大学生生活上の困難さ」や「対人関係上の困難さ」に対してもきめ細やかな支援を行うことができると考えられる。このようなきめ細やかな支援は発達障害学生がより適応的な学生生活を送ることに寄与するだけでなく、相談スタッフや一部の教職員の負担を軽減することにもつながると考えられる。

次に2点目の理由として、ピアサポートを行うことによって、発達障害学生の学業や大学生活に対する意欲の低下を防ぐことができる可能性があるためである。福岡（2007）は、大学生における友人からのサポートと自己充実的な達成動機、及び学業と大学生活における意欲低下との関連を検討した。その結果、友人からのサポートが自己充実的な達成動機を高め、大学生の学業と大学生活における意欲低下を防いでいるという関連が明らかになった。この調査は発達障害学生を対象にしたものではないが、発達障害学生においても友人からのサポートによって、学業と大学生活における意欲低下を防ぐことが示唆される研究も近年行われている。このような研究の1つとして、Siew, Mazzucchelli, Rooney, & Girdler (2017) の研究が挙げられる。Siew et al. (2017) は、10名の高等教育機関に在籍する発達障害学生（平均年齢 18.0歳）を対象に、Curtin Specialist Mentoring Program (CSMP) と呼ばれるプログラムを実施した。このCSMPは、ピアメンターとの一対一の関係を通して、ニーズを有した学生に対して柔軟な支援を提供することを目的としたプログラムである。CSMPの具体的なプログラムの内容としては、一週間に一度、心理学、言語病理学、作業療法について学んでいるピアメンターと、時間の管理や大学での学習、大学教員や同級生とのコミュニケーションについて相談をするというものであった。CSMPを実施した結果、大学生活により自信が持てるようになったことが明らかになった。これらの研究結果は、発達障害学生に対するピアサポートにおいても、彼・彼女らの学業や大学生活に対する意欲の低

下を防ぐことができる可能性を示唆するものである。

上述したように、発達障害学生に対するピアサポートを行うことは、より充実した発達障害学生支援の体制を構築するうえで極めて重要な視点である。その一方で、発達障害学生が大学生活において抱える全ての支援ニーズに対してピアサポートを行うことは難しいことも予想される。その理由としては以下の2つが考えられる。まず1点目は、発達障害学生に対してピアサポートを行う際に、支援を実施するピアサポーターが支援に一定の抵抗感を抱く可能性が挙げられる。このことについて、Neville & White (2011) は、発達障害学生の持つ支援ニーズとなりえる行動特徴自体が一般の大学生に対してネガティブな印象を与える場合があることを指摘しており、ネガティブな印象を与える支援ニーズについては十分なピアサポートを行うことができないと考えられる。

次に2点目は、ピアサポーター自身も大学における様々な課題や実習、サークル活動やアルバイトなど多忙な学生生活を送っていることが挙げられる。そのため、ピアサポーターに過度な負担が求められる支援を実施することが難しいということも考えられる。このように、ピアサポーターが支援できる発達障害学生の支援ニーズが、限定的なものである可能性が示唆される一方で、ピアサポーターがどのような種類の支援ニーズについて、ピアサポートを行うことができると考えているのか、もしくはどのような種類の支援ニーズについて、ピアサポートを行うことが難しいと考えているのかについてはこれまで先行研究において十分に明らかにされていない。

これらをふまえ、本研究では自閉症スペクトラム障害 (ASD) と注意欠如多動性障害 (ADHD) の2つの発達障害に焦点を当てる。自閉症スペクトラム障害とは、社会的コミュニケーションの障害と限局的・反復的行動パターンを特徴とする広汎で連続した発達障害である (American

Psychiatric Association, 2013)。そして、注意欠如多動性障害とは、持続的注意の困難さや注意の転導性などを特徴とする不注意の障害と、行動抑制の困難さなどを特徴とする多動性及び衝動性の障害を特徴とする発達障害である (American Psychiatric Association, 2013)。これらの発達障害を有する学生が抱える支援ニーズに対して、大学生がどのようなものであればピアサポートを行うことができ、どのようなものであればピアサポートを行うことが難しいと考えているのかを明らかにすることを本研究の目的とする。これらの点を明らかにすることによって、ピアサポートを含めた発達障害学生支援の体制を構築する際の有益な知見を提供することができると考えられる。

II. 方法

1. 対象者と実施手続き

対象者は四年制大学に通う51名(男性15名、女性36名)であり、社会福祉学を専攻する大学生であった。対象者の平均年齢は20.35歳 ($SD=0.74$; 年齢幅19-23歳)であり、調査は2016年の7月に、大学の講義が終了した後の時間を用いて集団で実施した。調査実施に際して、調査目的、調査への協力は任意であること、無記名であること、対象者が受講する調査者担当の講義の成績評価にこの調査は影響しないこと、回答しない、または回答を途中でやめることによる不利益が生じないことなどを、調査実施前に口頭で説明し、紙面にも記載した。なお、本研究は山口県立大学生命倫理委員会の承認を経て行われた(承認番号: 28-29)。

2. 質問項目

自閉症スペクトラム障害学生の支援ニーズに関するサポート項目: 自閉症スペクトラム障害学生の支援ニーズに関するサポート項目については、「ASD 困り感質問紙」(山本・高橋, 2009; 高橋, 2012) に記載されている支援ニーズをもとに作成した。「ASD 困り感質問紙」は、自閉症スペクトラム障害に関する既存の自己評価型

質問紙の項目に加え、当事者の手記や事例に基づいた文献などから、診断のある人が経験する「困りごと」を抽出し、作成された質問紙である。「ASD 困り感質問紙」は 25 項目から構成され、その妥当性についても確認されている。これらの点に加え、「ASD 困り感質問紙」が大学生の支援ニーズを把握する際に用いられていること（高橋, 2012）をふまえると、「ASD 困り感質問紙」は、自閉症スペクトラム障害学生の支援ニーズを表すものとして適当な指標であると考えられる。そこで本研究では、この「ASD 困り感質問紙」における各項目について、「あなたは以下の内容で困っている同級生をどの程度助ける、または手伝うことができそうですか？」という教示を行い、4「かなり助ける（手伝う）ことができる」、3「かなり助ける（手伝う）ことができる」、2「あまり助ける（手伝う）ことができない」、1「全く助ける（手伝う）ことができない」の 4 件法で回答を求めた。また、これらの質問項目を提示する際に、これらの困難さが自閉症スペクトラム障害のある学生が抱える困難さであることについては明示しなかった。その理由として、高等教育機関における発達障害学生の中には周囲に自分の障害を開示していない場合が多く、支援をする学生もその困難さが、発達障害があることに起因しているとはっきり分かることが少ないと考えられるためである。

注意欠如多動性障害学生の支援ニーズに関するサポート項目：注意欠如多動性障害学生の支援ニーズに関するサポート項目については、「ADHD 困り感質問紙」（岩淵・高橋, 2011；高橋, 2012）に記載されている支援ニーズをもとに作成した。「ADHD 困り感質問紙」も、注意欠如多動性障害に関する既存の自己評価型質問紙の項目に加え、当事者の手記や事例に基づいた文献などから、診断のある人が経験する「困りごと」を抽出し、作成された質問紙である。「ADHD 困り感質問紙」は 28 項目から構成され、こちらも妥当性については確認されている。

「ADHD 困り感質問紙」についても、大学生の支援ニーズを把握する際に用いられているため、注意欠如多動性障害学生の支援ニーズを表すものとして適当な指標であると考えられる。そこで本研究では、「ASD 困り感質問紙」と同様に、「ADHD 困り感質問紙」についても、各項目について、「あなたは以下の内容で困っている同級生をどの程度助ける、または手伝うことができそうですか？」という教示を行い、4「かなり助ける（手伝う）ことができる」、3「かなり助ける（手伝う）ことができる」、2「あまり助ける（手伝う）ことができない」、1「全く助ける（手伝う）ことができない」の 4 件法で回答を求めた。また、これらの質問項目を提示する際にも、これらの困難さが注意欠如多動性障害のある学生が抱える困難さであることについては明示しなかった。

3. 分析手続き

まず、「自閉症スペクトラム障害学生の支援ニーズに関するサポート項目」と「注意欠如多動性障害学生の支援ニーズに関するサポート項目」のそれぞれの質問項目について、支援することができるかと回答した人数（質問項目において 4、もしくは 3 と回答した人数）と支援することが難しいと回答した人数（質問項目において 2、もしくは 1 と回答した人数）を算出した。次に、それぞれの質問項目で支援することができると回答した人数、もしくは支援することができないと回答した人数がチャンスレベルを有意に上回っているかどうかを検討するために二項検定を実施した。また検定における統計の有意水準は 5%とした。これらの分析は SPSS Statistics 23.0 を用いて行われた。

III. 結果

1. 自閉症スペクトラム障害学生の支援ニーズに関するピアサポート

自閉症スペクトラム障害学生が抱える支援ニーズに対して、大学生がどのようなものであればピアサポートを行うことができ、どのような

ものであればピアサポートを行うことが困難だと考えているのかを検討するために、二項検定を実施した。その結果、＜次に何をするのかという具体的な指示がないと困ってしまう＞、＜授業や行事で「グループになってください。」と言われて困っている＞、＜初対面の人とどうやって話したらいいかわからずに困っている＞、＜雑談などの取り留めのない話をするのが苦手困っている＞、＜進学やクラス替えのとき新しい友人を作るのが苦手困っている＞、＜友達がいなくて寂しくて困っている＞、＜人と話しているとき、自分がいつ話せばいいかわからずに困ってしまう＞、＜グループ活動で居心地が悪くて困っている＞、＜孤立していると感じて困っている＞の9つの項目について、支援することができるかと回答した人数がチャンスレベルと比べて有意に多いことが明らかになった。その一方で、＜生活のリズムを乱されると困ってしまう＞の1項目について、支援することが難しいと回答した人数が有意にチャンスレベルと比べて多いことが明らかになった。以下、表1に具体的な質問項目と回答人数の割合について示した。

2. 注意欠如多動性障害学生の支援ニーズに関するピアサポート

注意欠如多動性障害学生が抱える支援ニーズに対して、大学生がどのようなものであればピアサポートを行うことができ、どのようなものであればピアサポートを行うことが困難だと考えているのかを検討するために、二項検定を実施した。その結果、＜提出物の締め切りや期限を忘れることがあり困ってしまう＞、＜誤解や早とちりが多くて困っている＞、＜新しい作業を習得するのに時間がかかってしまう＞、＜よく物をなくして困っている＞、＜学校や仕事の場面で単純なミスが多くて困っている＞の5つの項目について、支援することができるかと回答した人数がチャンスレベルと比べて有意に多いことが明らかになった。その一方で、＜生活が不規則で困っている＞、＜睡眠のリズムが不規則で困っている＞、＜授業中集中が続かなくて困っている＞、＜飽きっぽくて困っている＞の4つの項目について、支援することが難しいと回答した人数が有意にチャンスレベルと比べて多いことが明らかになった。以下、表2に具体的な質問項目と回答人数の割合について示した。

表1. 自閉症スペクトラム障害学生の支援ニーズに対する大学生のピアサポートに関する回答の概要

質問項目	行うことができると回答した人数	行うことが困難だと回答した人数	有意確率
次に何をするのかという具体的な指示がないと困ってしまう	45(88.2%)	6(11.8%)	$p < 0.01$
授業や行事で「グループになってください。」と言われて困っている	42(82.4%)	9(17.6%)	$p < 0.01$
初対面の人とどうやって話したらいいかわからずに困っている	41(80.4%)	10(19.6%)	$p < 0.01$
雑談などの取り留めのない話をするのが苦手困っている	39(76.5%)	12(32.5%)	$p < 0.01$
進学やクラス替えのとき新しい友人を作るのが苦手困っている	38(74.5%)	13(25.5%)	$p < 0.01$
友達がいなくて寂しくて困っている	37(72.5%)	14(27.5%)	$p < 0.01$
人と話しているとき、自分がいつ話せばいいかわからずに困ってしまう	36(70.6%)	15(29.4%)	$p < 0.01$
グループ活動で居心地が悪くて困っている	34(66.7%)	17(33.3%)	$p < 0.05$
孤立していると感じて困っている	34(66.7%)	17(33.3%)	$p < 0.05$
生活のリズムを乱されると困ってしまう	16(31.4%)	35(68.6%)	$p < 0.05$

注: 質問項目の右に記載した数字は質問項目番号を示す

表2. 注意欠如多動性障害学生の支援ニーズに対する大学生のピアサポートに関する回答の概要

質問項目	行うことができると回答した人数	行うことが困難だと回答した人数	有意確率
提出物の締め切りや期限を忘れることがあり困ってしまう	40(78.4%)	11(21.6%)	$p < 0.01$
誤解や早とちりが多くて困っている	35(68.6%)	16(31.4%)	$p < 0.05$
新しい作業を習得するのに時間がかかってしまう	35(68.6%)	16(31.4%)	$p < 0.05$
よく物をなくして困っている	34(66.7%)	17(33.3%)	$p < 0.05$
学校や仕事の場面で単純なミスが多くて困っている	34(66.7%)	17(33.3%)	$p < 0.05$
生活が不規則で困っている	17(33.3%)	34(66.7%)	$p < 0.05$
睡眠のリズムが不規則で困っている	13(25.5%)	38(74.5%)	$p < 0.01$
授業中集中が続かなくて困っている	12(32.5%)	39(76.5%)	$p < 0.01$
飽きっぽくて困っている	12(32.5%)	39(76.5%)	$p < 0.01$

注: 質問項目の右に記載した数字は質問項目番号を示す

IV. 考察

本研究では発達障害学生が抱える支援ニーズに対して、大学生がどのようなものであればピアサポートを行うことができ、どのようなものであればピアサポートを行うことが難しいと考えているのかを明らかにすることを目的とした。以下、自閉症スペクトラム障害学生の支援ニーズに対するピアサポートと注意欠如多動性障害学生の支援ニーズに対するピアサポートのそれぞれについて考察していく。

1. 自閉症スペクトラム障害学生の支援ニーズに関するピアサポート

まず、自閉症スペクトラム障害学生の支援ニーズに関するピアサポートについて述べる。分析の結果、<授業や行事で「グループになってください。」と言われて困っている>、<雑談などの取り留めのない話をするのが苦手で困っている>、<初対面の人とどうやって話したらいいかわからずに困っている>、「次に何をするかという具体的な指示がないと困ってしまう>、<友達がなくて寂しくて困っている>、<進学やクラス替えのとき新しい友人を作るのが苦手で困っている>、<グループ活動で居心地が悪くて困っている>、<孤立していると感じて困っている>、<人と話しているとき、自分が

いつ話せばいいかわからず困ってしまう>の9つの項目について、大学生はピアサポートを行うことができると考えていることが明らかになった。これらの項目のうち<次に何をするかという具体的な指示がないと困ってしまう>を除く、8つの項目は友人との関係作りやコミュニケーションに関する支援ニーズであった。これらは、丹治・野呂(2014)でも指摘されていた「対人関係上の困難」に該当すると考えられる項目であると考えられる。この結果の解釈としては、「対人関係上の困難」が大学生にとって身近であるため、支援しやすいと回答した大学生が考えた可能性が考えられる。日本学生支援機構が平成26年度に実施した学生生活調査によると、大学生の17.9%が学内の友人関係に関する悩みを抱えていることが明らかになっている(日本学生支援機構, 2016)。さらに、こうした対人関係上の困難さが大学生活における適応に影響していることも指摘されている(西垣・小林, 2004)。これらの知見から、「対人関係上の困難」は自閉症スペクトラム障害学生だけに限定したものではなく、すべての大学生にとって身近な問題であることがわかる。そのため、回答した大学生自身も「対人関係上の困難」の支援ニーズを身近なものとして捉えることがで

き、自身の「対人関係上の困難」について援助された経験を想像することや、他者の「対人関係上の困難」を援助した経験を想像することによって、「対人関係上の困難」について支援することができるという回答した可能性が考えられる。また、＜次に何をするのかという具体的な指示がないと困ってしまう＞という支援ニーズについても、具体的な支援の方法が大学生にイメージしやすかったことが、支援を行うことができるという回答につながったと考えられる。この支援ニーズ自体は、自閉症スペクトラム障害者において頻繁に指摘される実行機能の障害（Ozonoff, Pennington, & Rogers, 1991）に起因すると考えられ、「対人関係上の困難」には当てはまらないように見える。実行機能とは、将来的な目標を達成するために必要な適切な問題解決のための構えを維持する能力であると定義され（Ozonoff et al., 1991）、この支援ニーズは、将来の目標に対する適切な構えを形成できないために、＜次に何をするのかという具体的な指示がないと困ってしまう＞と解釈できる。しかしながら、この支援ニーズに対する支援についても、次の予定を伝えることや次の予定を一緒に組み立てるといった具体的な支援方法を考えやすく、実際に大学生自身が支援を行うイメージをしやすくと考えられる。そのため、この支援ニーズに対しては、支援することができるという回答する割合が多かったと推察できる。

その一方で、＜生活のリズムを乱されると困ってしまう＞の1項目については、大学生はピアサポートを行うことが難しいと考えていることが明らかになった。この結果の背景には、この支援ニーズが自閉症スペクトラム障害学生の生活全般にわたる支援ニーズであることがあげられる。生活のリズムを乱す要因は、課題レポートや期末のテスト等の大学内の要因だけでなく、風邪等の病気やアルバイトなどの大学外の要因も多く含まれる。そして、こうした大学外の要因によって引き起こされる支援ニーズに対して支援することは、支援をする大学生も大

学外の要因について十分に把握する必要がある。このように自閉症スペクトラム障害学生の生活リズムを乱す大学外の要因を把握することは大学生にとっても負担が大きいことが考えられるため、「生活のリズムを乱されると困ってしまう」という支援ニーズに対してピアサポートを行うことが難しいと回答した可能性が考えられる。

2. 注意欠如多動性障害学生の支援ニーズに関するピアサポート

次に、注意欠如多動性障害学生の支援ニーズに関するピアサポートについて述べる。分析の結果、＜よく物をなくして困っている＞、＜誤解や早とちりが多くて困っている＞、＜新しい作業を習得するのに時間がかかってしまう＞、＜提出物の締め切りや期限を忘れることがあり困ってしまう＞、＜学校や仕事の場面で単純なミスが多くて困っている＞の5つの項目について、支援することができると考えていることが明らかになった。これらの支援ニーズのうち、＜新しい作業を習得するのに時間がかかってしまう＞、＜提出物の締め切りや期限を忘れることがあり困ってしまう＞、＜学校や仕事の場面で単純なミスが多くて困っている＞の3つは、注意欠如多動性障害の障害特性によって引き起こされた「学業上の困難さ」（丹治・野呂, 2014）だと考えられる点が特徴である。すなわち、注意欠如多動性障害学生の有する不注意や衝動性といった障害特性によって、講義内容や大学教員からの指示を見逃すことや聞き逃すことが多くなる、課題を継続して行うことができず先延ばしにしてしまう、課題を実施する際の計画を十分に立てることができないといった学業上の困難（篠田・沢崎, 2012）に対して、大学生は支援することができると考えていたということである。この結果の解釈としては、これらの「学業上の困難さ」の支援ニーズを支援することに対する援助必要性の強さと心理的負担感の低さがあると考えられる（真下・山村・三宮・坂, 2014）。真下ら（2014）は大学生を対象とした「学業上の困難さ」に関連する以下の実験を行

った。実験の概要は髪型、グループワーク、課題の実施方法、マナーといった場面のシナリオを提示し、それぞれの場面において友人にアドバイスをすることに対する援助の必要性と心理的負担感を調査するものであった。この実験の結果、課題の実施場面においてアドバイスをすることは他の場面においてアドバイスをすることに比べて、援助をする必要性を強く認識するとともにアドバイスをすることの心理的負担感が低いことが明らかになった。この実験で用いられた課題の実施場面に関するシナリオとは、複数の課題を実施する順番が決められず、課題の提出が困難になっている友人にアドバイスするというものであった。このシナリオは、注意欠如多動性障害学生の有する「学業上の困難さ」と通じるものであると考えられる。これらのことをふまえると、注意欠如多動性障害の障害特性によって引き起こされた「学業上の困難さ」の支援ニーズは、援助をする必要性を強く認識させるものであるとともに、支援を実施する際に心理的負担感が低いものであるため、大学生は支援することができると考えたと推測できる。また、〈よく物をなくして困っている〉、〈誤解や早とちりが多くて困っている〉の2つは、なくしたものを一緒に探す、誤解や早とちりに対して正確な情報を教えるなどの具体的な支援の方法が大学生にイメージしやすかったことが、支援を行うことができるという回答につながったと考えられる。

その一方で、〈睡眠のリズムが不規則で困っている〉、〈生活が不規則で困っている〉、〈授業中集中が続かなくて困っている〉、〈飽きっぽくて困っている〉の4つの項目について、支援することが難しいと考えることが明らかになった。これらの項目のうち、〈睡眠のリズムが不規則で困っている〉、〈生活が不規則で困っている〉の2つは、自閉症スペクトラム障害学生の支援ニーズでも見られた生活全般にわたる支援ニーズであると考えられる。そのため、自閉症スペクトラム障害学生の場合と同様に、

注意欠如多動性障害学生の生活リズムを乱す大学外の要因を把握することは大学生にとっても負担が大きいことが考えられるため、〈睡眠のリズムが不規則で困っている〉、〈生活が不規則で困っている〉という支援ニーズに対してピアサポートを行うことが難しいと回答した可能性が考えられる。また、〈授業中集中が続かなくて困っている〉、〈飽きっぽくて困っている〉の2つは、注意欠如多動性障害学生の障害特性そのものに関連する支援ニーズであることが考えられる。この注意欠如多動性障害の障害特性に関する介入研究は様々な実践が報告されているが(安藤・熊谷, 2015; Shuai, Daley, Wang, Zhang, Kong, Tan, & Ji, 2017)、これらの介入は専門家により厳密にデザインされたものであり、かつ継続的に一定期間実施されるものが多い。その一方で、ピアサポートを行う大学生は支援の計画を厳密にデザインし、継続的に一定期間支援を実施するための時間を確保することが難しい。そのため、大学生は支援を行うことが困難だと回答したと考えられる。

3. 本研究の結果を踏まえた障害理解教育の提案

ここでは、本研究の結果を踏まえた上で必要だと考えられる障害理解教育について提案していく。本研究の結果を踏まえると、学生がピアサポートを行いやすいと考えている領域に関する具体的な支援方法についての理解を深める教育が高等教育機関において重要であると考えられる。本研究の結果から、自閉症スペクトラム障害学生の抱える困難さの中の「対人関係上の困難さ」及び、注意欠如多動性障害学生の抱える困難さの中の「学業上の困難さ」について、学生は支援を行うことができると考えていたことが明らかになった。しかしながら、学生が支援を行うことができると考えているからといって、これらの学生が発達障害学生の抱える困難さに対して適切な支援を行うことができるとは限らない。なぜなら、発達障害学生の有する障害特性を踏まえると、学生がイメージしている

支援方法と発達障害学生にとって適切な支援方法との間に若干の乖離があることが考えられるためである。具体的には、自閉症スペクトラム障害学生に頻繁に見られる他者の心的状態を読み誤る特徴や、注意欠如多動性障害学生に頻繁に見られる持続的注意の困難さを踏まえた上でピアサポートを行うことが必要となる。この可能性を考えると、高等教育機関における講義やワークショップ等のプログラムの中で、単に発達障害学生の有する障害特性や抱える困難さのみを伝えるのではなく、抱えている困難さの中でもピアサポートの意識が高い「対人関係上の困難さ」や「学業上の困難さ」について、どのように支援すればよいのかという点を中心に伝えていく必要があると考えられる。

4. まとめと今後の課題

発達障害学生に対するピアサポートに関する学生の意識として、本研究では以下の2点を明らかにすることができた。まず1点目として、自閉症スペクトラム障害学生に対するピアサポートにおいて、大学生は「対人関係上の困難さ」や具体的な支援方法が容易に思い浮かぶ支援ニーズについてはピアサポートを行うことができると考えている一方で、生活リズムが乱れるという支援ニーズについてはピアサポートを行うことが困難だと考えていることを明らかにした。次に2点目として、注意欠如多動性障害学生に対するピアサポートにおいて、大学生は「学業上の困難さ」についてはピアサポートを行うことができると考えている一方で、生活リズムに関する支援ニーズや障害特性事態に関連する支援ニーズについてはピアサポートを行うことが困難だと考えていることが明らかになった。これらの知見は今後の高等教育機関における発達障害学生支援の体制を構築していく上での有益な示唆を与えるだろう。具体的には以下の3つが、今後の発達障害学生支援の体制を構築するうえで求められると考えられる。

まず1点目が、上述した高等教育機関における障害理解教育を実施することである。現在、

多くの高等教育機関において障害理解教育が実施されている（例えば菊池, 2012）。しかしながら、これらの障害理解教育は教育学部や社会福祉学部をはじめとする、将来的に障害児・者と係わる進路を志望する学生の多い学部においてのみ実施されている場合が多い。発達障害学生が年々増加している現状を踏まえると、限られた学部のみで障害理解教育を実施するだけでは、ピアサポートを行う体制を整えることは難しい。そのため、各高等教育機関における基礎教養科目等において、高等教育機関における発達障害学生のピアサポートに関する理解教育を実施することが、充実した発達障害学生支援の体制を構築するうえで重要だと考えられる。

次に2点目が、学生同士が互いに相談をしやすくなる関係性づくりである。本研究の結果からも明らかになったように、その場のアドバイスで解決できるような発達障害学生の支援ニーズについて、学生はピアサポートを行うことができると考えていることが明らかにされた。したがって、高等教育機関においてはその学生同士がアドバイスをし合うことができるような、ピアへの相談機会を保障するプログラムや関係性作りのプログラムを実施することが求められる。近年、国内外のいくつかの高等教育機関においては関係性作りのプログラムが実施されている（福田, 2012; Siew et al., 2017）。例えば上述した Siew et al. (2017) では、CSMP を実施した結果、プログラムを実施する前に比べて実施した後の方が、ASD 学生のソーシャル・サポートが増えるとともに、全般的なコミュニケーションが改善されたことが明らかとなった。こうした結果を踏まえると、このようなプログラムのさらなる普及が求められる。

3点目が、高等教育機関における生活リズム支援プログラムの実施である。本研究の結果、自閉症スペクトラム障害学生と注意欠如多動性障害学生に共通のニーズである生活リズムの乱れについて、大学生はピアサポートを行うことが難しいと考えていた。そのため、この支援ニ

ーズに対しては大学側が支援を実施していくことが必要である。この点について高橋（2012）は、個別面接の実施などに加え、ライフスキルを学ぶワークショップを実施する、ライフスキルを学ぶことができる施設を紹介するなどの取り組みを行うことが支援として考えられることを指摘している。このことをふまえ、高等教育機関ではそれぞれの実状をふまえた支援を提供する必要があると考えられる。

最後に本研究の課題について3つ述べる。まず1点目は本研究の対象者が非常に限定されていたという点である。本研究の対象者である大学生は社会福祉学を専攻する者であった。社会福祉学を専攻する学生の多くが、社会性が高く、他者に対する援助志向性も高いということを踏まえると、本研究で示された結果が、社会性が高く、他者に対する援助志向性も高い学生に限定された結果である可能性が考えられる。そのため、今後の課題として様々な所属の学生を対象にした調査を行う必要があると考えられる。次に2点目は本研究の質問で示した困難さの程度が、対象者ごとにばらつきがあった可能性があるという点である。本研究で使用した質問紙では、各項目で示された困り感が発達障害学生に見られるものであるという点については記載していなかった。そのため、質問項目で提示された困難さが、「発達障害学生に見られる程度の困難さ」から「典型発達学生に見られる程度の困難さ」までの間でばらつきがあった可能性がある。このことをふまえると、質問項目を発達障害学生に見られる困難さの程度として、より厳しく統制した上で検証を行い、本研究の結果と比較することが必要だと考えられる。最後に3点目として、本研究ではピアサポートへの意識と学生個人の有する特性との関連が十分に検討できていない点が挙げられる。学生のピアサポートへの意識は学生が発達障害に関する知識をどれほど有していたかに依存すると考えられる。それだけでなく、学生個人の共感性や障害児・者との接触経験などの学生個人の特性によ

って異なることも考えられる。これらの点をふまえると、学生個人のどのような特性がピアサポートに対する意識に影響を与えているのかを検討していくことが必要となるだろう。

文献

American Psychiatric Association (2013) *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Fifth Edition*, American Psychiatric Association.

安藤瑞穂・熊谷恵子 (2015) ADHDのある成人に対するコーチング適用事例—介入経過の報告と日常生活上の困難さの変化—, 障害科学研究, 39, 151-166.

Denis, C. (2003) Peer Support within a Health Care Context: A Concept Analysis, *International Journal of Nursing Studies*, 40, 321-332.

福田雄一 (2012) 適応や人間関係の促進に焦点をあてた初年次教育科目の構築, 広島文教女子大学心理臨床研究, 3, 1-9.

福岡欣治 (2007) 大学新入生のソーシャル・サポートと心理的適応—自己充實的達成動機の媒介的影響—, 静岡分化芸術大学紀要, 8, 69-77.

Gardiner, E. & Iarocci, G. (2014) Students with Autism Spectrum Disorder in the University Context: Peer Acceptance Predicts Intention to Volunteer, *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 44, 1008-1017.

後藤綾文・菊池紀彦 (2016) 障がい学生支援推進に向けての取り組み—三重大学における現状と課題—, 三重大学教育学部研究紀要, 自然科学・人文科学・社会科学・教育科学, 67, 293-299.

池田敦子・田部絢子・石川衣紀・内藤千尋・神長涼・石井智也・高橋智 (2017) 大学の教職課程における発達障害学生支援と合理的配慮, 東京学芸大学紀要, 総合教育科学系, 68, 125-133.

- 岩渕未紗・高橋知音 (2011) 大学生の ADHD 困り感質問紙の作成, 信州臨床心理紀要, 10, 13-24.
- 川住隆一・吉武清實・西田充潔・細川徹・上埜高志・熊井正之・田中真理・安保英勇・池田忠義・佐藤静香 (2010) 大学における発達障害のある学生への対応-四年制大学の学生相談機関を対象とした全国調査を踏まえて-, 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 59, 435-462.
- 菊池哲平 (2012) 大学生における発達障害に対する態度の変容-VTR 視聴、ディスカッション、講義を通して-. 熊本大学教育学部紀要人文科学, 61, 125-133.
- 真下知子・山村麻予・三宮真智子・坂香里 (2014) 女子大学生間のアドバイス場面における行動義務と心理的負担感の差異, 日本教育工学会誌, 38, 85-88.
- McCurdy, E.E. & Cole, C.L. (2014) Use of a Peer Support Intervention for Promoting Academic Engagement of Students with Autism in General Education Settings, *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 44, 883-893.
- Neville, R.E.A. & White, S.W. (2011) College Students' Openness toward Autism Spectrum Disorder: Improving Peer Acceptance, *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 41, 1619-1628.
- 日本学生支援機構 (2016) 平成 26 年度『学生生活調査』.
- 西垣順子・小林正信 (2004) 大学生活への適応状況に関連する要因についての調査, 信州大学教育システム開発研究センター紀要, 10, 25-35.
- Ozonoff, S., Pennington, B. F., & Rogers, S. J. (1991) Executive Function Deficits in High-Functioning Autistic Individuals: Relationship to Theory of Mind, *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 32, 1081-1105.
- 佐藤克敏・徳永豊 (2006) 高等教育機関における発達障害のある学生に対する支援の現状, 特殊教育学研究, 44, 157-163.
- 佐藤克敏・徳永豊 (2007) 障害に関する教育心理学的研究の動向と課題-高等教育段階の軽度発達障害のある学生の支援に関する研究課題-, 教育心理学年報, 46, 121-129.
- Shuai, L., Daley, D., Wang, Y.F., Zhang, J.S., Kong, Y.T., Tan, X., & Ji, N. (2017) Executive Function Training for Children with Attention Deficit Hyperactivity Disorder, *Chinese Medical Journal*, 130, 549-558.
- Siew, C.T., Mazzucchelli, T.G., Rooney, R., & Girdler, S. (2017) A specialist peer mentoring program for university: A pilot study, *PLoS One*, 12, e0180854.
- 篠田直子・沢崎達夫 (2012) ADHD 特性を持つ大学生の特徴と大学生活への適応, 目白大学心理学研究, 8, 49-62.
- 高橋知音 (2012) 『発達障害のある大学生のキャンパスライフサポートブック』, 学研出版.
- 丹治敬之・野呂文行 (2014) 我が国の発達障害学生支援における支援方法および支援体制に関する現状と課題, 障害科学研究, 38, 147-161.
- Watkins, L., O'Reilly, M., Kuhn, M., Gevarter, C., Lancioni, G.E., Sigafos, J., & Lang, R. (2015) A Review of Peer-Mediated Social Interaction Interventions for Students with Autism in Inclusive Settings, *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 45, 1008-1017.
- White, S.W., Elias, R., Salinas, C.E., Capriola, N., Conner, C.M., Asselin, S.B., Miyazaki, Y., Mazefsky, C.A., Howlin, P., & Getzel, E.E. (2016) Students with autism spectrum disorder in college: Results from a preliminary mixed methods needs analysis, *Re-*

search in Developmental Disabilities, 56, 29-40.

山本奈都実・高橋知音（2009）自閉症スペクトラム障害と同様の行動傾向を持つと考えられる大学生の支援ニーズ把握の質問紙の開発, 信州臨床心理紀要, 8, 35-45.

付記

本調査にご協力いただきました対象者の皆様に深く感謝申し上げます。なお、本論文は日本特殊教育学会第55回大会と日本心理学会第81回大会で発表したものを修正し、まとめたものである。本研究は JSPS 科学研究費補助金 17K13918 及び、山口県立大学研究創作活動助成（基盤研究型）「高等教育機関における発達障害学生に対するピアサポートに関する基礎的研究」による助成を受けた。

Peer Support for Students with Developmental Disorders in Higher Education by Typically Developing Students: The Needs of Support for Students with Developmental Disorders

NAGASE Kai

Peer support to students with developmental disorders in universities is paid attention to in research their number in universities is increasing. The purpose of this study is to investigate the content of special support needs for students with developmental disorders that is provided by typically developing university students.

The participants were 51 (36 females and 15 males) volunteering undergraduate students of a university, who are typically developing. Their mean age was 20.35 years (SD = 0.74), ranging from 19 to 23 years. To measure the extent to which each aspect of peer support was provided easily by a peer supporter, a revised version of the Feeling troubles of Autism Spectrum Disorder (ASD) Scale and a revised version of the Feeling troubles of Attention Deficit Hyperactivity Disorder (ADHD) Scale were used. All items in each scale were rated on a Likert scale from 1 (not at all) to 4 (very much). I calculated the number of participants who reported that they could support students with ASD and ADHD in each items of the two scales first (the number of participants who rated 3 or 4). Second, in each item, we calculated whether the number of participants who could support students with ASD is above chance level (Binomial Test).

Results showed that typically developing university students could support those with “difficulties in social interaction” as a special support need in ASD and “difficulties in schoolwork” as a special support need in ADHD. It is considered that “difficulties in social interaction” is a common problem for typically developing university students, and “difficulties in schoolwork” does not impose mental burden on them. Therefore, typically developing university students could support these special needs easily. Results also showed that typically developing university students could not provide support for “difficulties in lifestyle” as a special support need in those with ASD and ADHD and for “characteristics of ADHD” easily. It is considered that “difficulties in lifestyle” impose mental burden on typically developing university students, and professional knowledge and skills are needed in order to support difficulties caused by “characteristics of ADHD.” Therefore, typically developing university students could not fulfill these special support needs easily.